



# 第2回国際シンポジウム 開催レポート

## Report on the Second International Symposium



## 第2回国際シンポジウムを振り返って

大里 浩秋（神奈川大学大学院外国語学研究所 教授 / 事業推進担当者 / 国際シンポジウム実施委員会委員長） OSATO Hiroaki

10月28、29日は、晴れ上がったとは言えないまでも常時青空はのぞく、謂わばシンポジウム日和であった。主催者としては参加者の入りが気になるところであったが、両日ともフロアの前半分は程々に埋まってほっとした。加えて、私たちの研究に深い関心を持ってくださる方がその中に少なからずおられたことを、最後にフロアからの感想を述べていただいた際に知った。しかし、情宣活動にいくつかの課題が残ったことは確かである。神奈川大学内での、とりわけ学生を引きつけるPRを行えたのか、外部に向けての宣伝は十全だったのか等々。気の利いたポスターを作るだけでは人が集まらないのであり、日ごろの地道な研究があり、それを適宜公表して人々の関心を引き起こす活動をしていてこそ、にわかな情宣も生きるのである。心したいと思う。以下、シンポジウム実施委員会の責任者として、2点記したい。

1点は、準備過程のことである。実施委員は当初6人、途中から7人で構成した。そのうちの4人は、シンポジウムでの4つのセッションの各コーディネーターとなり、パネリスト、コメンテーターの人選からその人たちへの原稿催促、更に本人もパネリストか司会役をやるという、見るからに過重な仕事を受け持つ事になった。結果は、4人ともその役割を見事にこなしたのだが、無理がなかったとはい

えないので、来年の第3回シンポジウムに際しては、仕事の集中を避け協力の輪を広げる工夫をしてほしいと思う。準備全般について言えば、去年のシンポジウムの経験が活かされ、かつ事務の方たちの献身を得てほぼ順調に進み、シンポジウム当日も問題なく運営することが出来た。これは次回にも十分に活かせることである。

もう1点は、シンポジウムの中身についてである。今回は「非文字資料から人類文化を読み解く」というテーマのもと、日ごろ取り組んでいる課題別に研究内容の中間報告をすると同時に、それぞれに到達した地点から我々COEの共通テーマである「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に向けた議論をしようとするものだった。それゆえ、各セッションの報告は、各課題の研究の到達点を最大限明らかにする事に努めたはずであり、コメントもそのことを踏まえてのものであり、最後の総合討論も来年度がこのプログラムの最終年度になることを念頭においての議論のかみ合わせであるはずであった。ここで私の感想を述べると、登場した皆さんは精一杯の準備をして臨んで下さり、良くも悪くも我々の共同研究の現状が素直に反映したものとなり、刺激的な内容もあったが、まだ克服しなければならない問題もかなりある、というものだった。来年のシンポジウムが期待されるゆえんである。